

養老山地を見渡す情熱の赤

## 『揖斐川（津屋川）で彼岸花満開！』

- 河川巡視業務の一環で、かいづし なんのうちょう つやがわ海津市南濃町津屋の津屋川堤防を訪れた9月19日（金）、赤々と燃え盛る炎のような彼岸花ひがんばなが見頃を迎え、散策する住民や写真愛好家らを楽しませていました。  
海津市の好景観場所の1つに数えられる津屋川の彼岸花は、左岸堤防約3キロにわたり、約10万本が咲き誇る県内随一の群生地として有名、自生種として自然繁殖したものとされています。地元の方に聞いたところ、例年、秋分の日頃に見頃を迎えるが、今年は残暑も弱く、例年より早く咲き誇っているとのことでした。

秋を彩る彼岸花は、何気なく怪しい雰囲気を漂わせ、900以上の呼び名があると言われています。そんな彼岸花の「別名の呼び名」と、「その言われ」を紹介します。（出典：wikipediaなど）

### ■彼岸花＝「曼珠沙華」はサンスクリット語から命名

- 彼岸花は、古くから「曼珠沙華（まんじゅしゃげ）」とも呼ばれ、仏教と関わりが深い花です。彼岸の頃、田んぼや畦、土手、道端に炎が燃えるように咲きつらねます。  
曼珠沙華は、サンスクリット語で「天界に咲く花」という意味です。おめでたい事が起こる兆しに赤い花が天から降ってくる、という仏教の経典から来ています。



## ■彼岸の頃に咲くことから「彼岸花」「死人花」「幽霊花」

- 彼岸花は、秋の彼岸の頃に咲くことから彼岸花と呼ばれています。また、土葬をモグラや野ネズミから守る意味もあって墓地などによく植えられているため、「死人花（しびとばな）」「地獄花（じごくばな）」「幽霊花（ゆうれいばな）」と呼ぶ地方もあります。



墓地の傍らに咲く彼岸花（揖斐川町内）

## ■毒があることから、「毒花」「痺れ花」



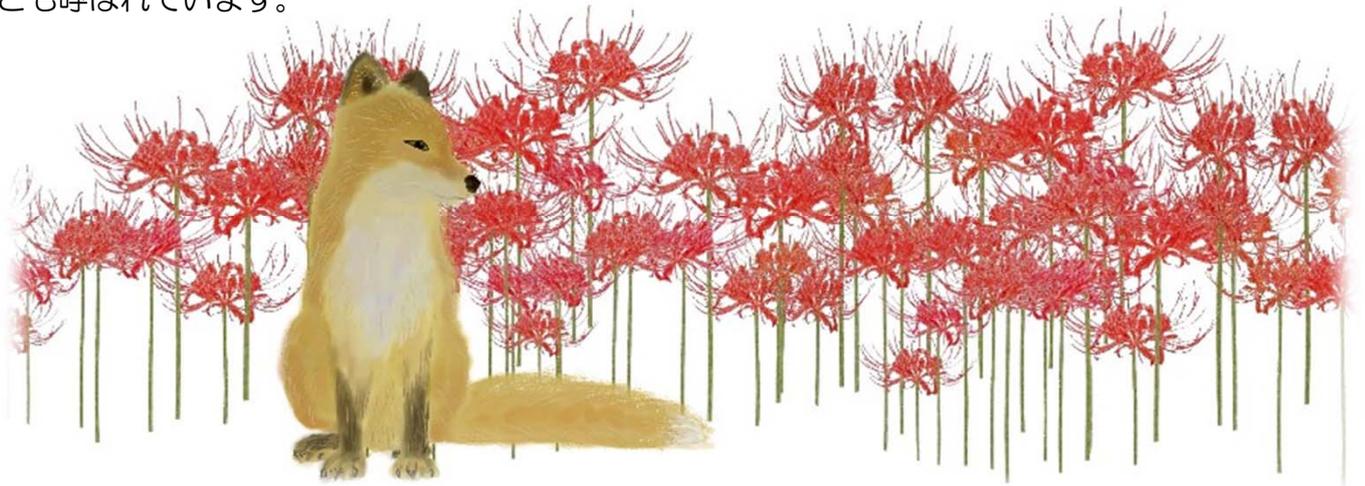
田んぼの畦に咲く彼岸花（揖斐川町内）

- 彼岸花には、球根にアルカロイドという毒があるため、「毒花（どくばな）」「痺れ花（しびればな）」などと呼ばれることがあります。田んぼの畦道などに彼岸花が多いのは、その毒でモグラや野ネズミを防除する目的があるためだと言われています。

## ■花の姿からついた名前「天蓋花」「狐の松明」「葉見ず花見ず」

- 花の様子から、「天蓋花（てんがいばな）」「剃刀花（かみそりばな）」「狐の松明（きつねのたいまつ）」「狐のかんざし」「狐のたんぼぼ」「狐ぐさ」「狐のおうぎ」などがあります。「狐（きつね）」の名前が多いのは、昔の人は、狐が化けたものと思ったのかも知れません。

また、花の咲く時期（秋）には葉がなく、葉のある時期（冬）には花がないという特徴から、「葉見ず花見ず」とも呼ばれています。



## ■田んぼの彼岸花？

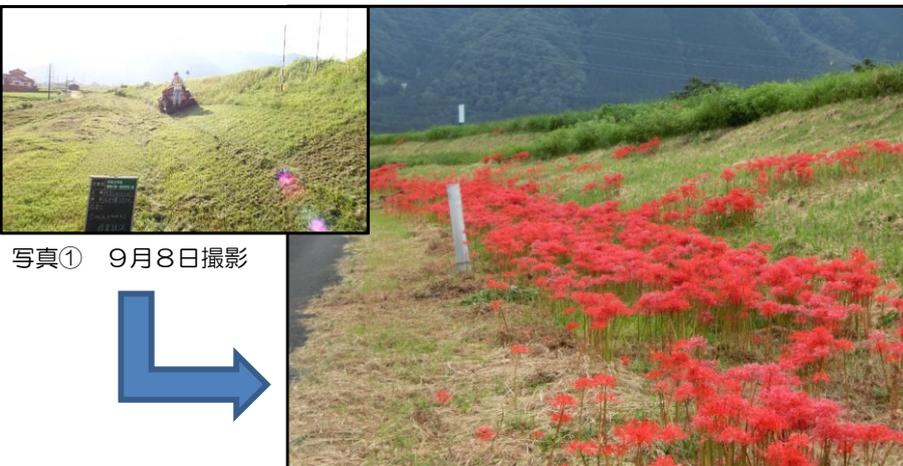
彼岸花は、花のつぼみが伸びてくる前、9月上旬に畦の草刈りをするすると、他の草に邪魔されずに、咲くことができます。また、花が咲き終わる10月上旬にまた草刈りをする。その後で、彼岸花の葉が出てきて良く茂ります。このタイミングがずれると、花や葉を切り彼岸花は育たなくなります。彼岸花が良く咲いている田んぼの畦は、よく手入れがされている証拠だそうです。



## ■堤防除草と彼岸花？

写真①は、今年9月初旬に撮影した河川堤防の草の刈り取り直後のものです。写真②は、約2週間後のものです。日当たりが良くなり、他の草に邪魔されずに、綺麗に彼岸花が咲き誇っています。

また、一般的に彼岸花は、赤い花をイメージしますが、赤以外にも、ピンク、白、黄、最近では、オレンジのものもありますが、あまり一般的に知られていません。



写真① 9月8日撮影

写真② 9月20日撮影（揖斐川右岸58.0Kp）



赤と白の彼岸花の混生（揖斐川町内）

## ■彼岸花は食べられる？

彼岸花は、食物が不足する時の食料として人が植えたとも言われています。球根を食べることはできますが、そのままでは毒があるため、すり潰して水を注ぎ続けて7日位置いて毒を抜き、水を切って、丸めて団子にして、焼いて食べていたそうです。救飢植物として第二次世界大戦中などの戦時や非常食だったそうです。

